

「夢やぶれて」。大好きなミュージカルの劇中歌のタイトルだが、今まさにそんな気分である。もうおしまい、真っ暗、夢も目標も分からない。英題では「I Dreamed a dream」。夢を夢見た、と訳される。タイトルだけでも私の絶望が伝わるだろうか。

私は六才から舞台女優を夢見ていた。子役は大人の中で視覚的にも子供に見えなければならぬ。ある舞台では大人が子供を演じる時、膝立ちで舞台上にいるほど、子役には主に身長で旬があり、百八十センチメートルの父と百六十五センチメートルの母の子である私も平均よりは大きい。募集要項を見ては足りない年齢とオーバーした身長に何度も落胆した。それでも信頼できる素晴らしい講師に出会い、いくつかの舞台に立つこともできた。私の旬は短い。分かっていたことだ。すでに身長は百五十センチメートル目前で、同年代はまだまだこれからという十一才、ギリギリ身長が設定内のある舞台に最後のつもりで挑戦した。舞台となる時代を考察し、何度もイメージし、練習を重ねた。歌唱審査もダンス審査も過去最高のパフォーマンスで挑めた。自信があった。しかし、結果は落選だった。

思った以上に落ちこみ、頭の中では「夢やぶれて」が流れ続ける。私はよく、気持ちに合わせミュージカルの楽曲を口ずさんだり、時には熱唱するが、今回はいつものように歌う気にもならない。こんなことは初めてだ。

私の夢は、小五の七月に一度幕を閉じた。落選の知らせから、ミュージカルであふれていた私の日常はすっかり変わってしまった。でも、気持ちを文章にしてみると、少し冷静になれた気がしないこともない。気持ちの整理をつけて、勉強をし、経験を積み、視野を広げ、新しい夢と目標を見つけようと思う。私の頭の中に「夢やぶれて」ではない音楽も流れてきますように。

明日を歌う「メモリー」や底抜けに明るい応援歌「みんなスター」、私であることを誇る「デイス・イズ・ミー」を熱唱したい。